

三宅医学研究所理事長 三宅信一郎氏

# 香川の医療最前線



◆みやけ・しんいちろう 川崎医科大学卒業。土肥病院整形外科を経て1989年に財団法人三宅医学研究所付属三宅病院副院長。2001年から現職。11年に工学博士取得。日本整形外科学会専門医、日本リハビリテーション医学会臨床認定医。高松市出身。59歳。

病気やけがの発症から、日常生活活動の回復に欠かせないリハビリテーション。治療や障害の予防に重点を置いた急性期のリハビリとともに、回復期のリハビリが退院後の生活を大きく左右するという。県内でいち早く回復期のリハビリテーション病院を開院した三宅医学研究所の三宅信一郎理事長に、回復期リハビリの内容や役割を聞いた。

## 回復期のリハビリ

# 意欲と継続訓練が鍵

## 在宅復帰へ訓練士連携

リハビリを受ける患者に多い疾患は、

過剰患者もいる。症状が安定したり、疾患の治療・管理が可能ならば、回復期病院に移る。転院は地域連携室が調整し、受け入れが可能かを判断する。ただ、県内にはまだ、回復期病院が少ないのが現状だ。

急性期病院などで手術・治療をした患者をリハビリテーション病院で受け入れている。理学療法士や作業療法士、言語聴覚士、看護師、介護福祉士らが連携して365日、訓練を行う体制を整え、在宅復帰率は80%と高い。

訓練士は、訓練はどのように行う。日常生活でできること、

近年、高齢化に伴って増加が目立つ疾患がある。一つは、脚の付け根が折れる大腿骨頸部骨折。もう一つは、脳卒中などの脳血管疾患だ。生活習慣が変わり、元気な高齢者が増えた。当院でも15年前は60歳ほどだった外来患者の平均年齢が、80歳まで上がっている。

急性期病院などで手術・治療をした患者をリハビリテーション病院で受け入れている。理学療法士や作業療法士、言語聴覚士、看護師、介護福祉士らが連携して365日、訓練を行う体制を整え、在宅復帰率は80%と高い。

訓練士は、訓練はどのように行う。日常生活でできること、

訓練士は、訓練はどのように行う。日常生活でできること、

急性期 診療拠点病院

回復期 リハビリテーション病院

在宅

急性期 診療拠点病院

回復期 リハビリテーション病院

在宅

急性期 診療拠点病院

回復期 リハビリテーション病院

在宅

急性期 診療拠点病院

回復期 リハビリテーション病院

在宅

急性期 診療拠点病院

回復期 リハビリテーション病院

在宅

急性期 診療拠点病院

回復期 リハビリテーション病院

在宅

リハビリテーション病院は、整形外科を中心に常勤医師4人が勤務。通所リハビリテーションセンターなどのグループ施設と連携し、理学療法士35人、作業療法士13人、言語聴覚士2人、歯科衛生士2人の計52人がリハビリにあたる。所在地：高松市天神前5-5 電話：087(831)2101 <http://www.miyake.or.jp/>

患者が意欲を持ち、継続的に取り組むことが重要。一度やめると、元に戻っている機能が低下してしまふ。また、中には、手術後の痛みなどで意欲が低下している患者もいる。レクリエーションで体を動かすよう働きかけ、「元に戻りたい」という気持ちを持ってもらうように気を付ける。退院後の注意点を。退院後は通所リハビリに取り組み、難しい場合は、週3日程度、訪問リハビリを行う。ここでも、いかに継続できるかがポイントで、家族の応援が必要だ。独居高齢患者も増えており、老人会など、地域の支えやケアマネージャーらの定期的な連絡も欠かせない。